



## 花の印象

### — たゆたう像を求めて —

幼い頃から花は美しいものと教わってきましたが、  
実際の花はいつもどこか朽ちていて完全な姿を見せてくれません。  
その美しさは印象が織り重なった中に浮かぶ幻のようなもの。  
はっきりと像を結ばないからこそ惹きつけられる、儚い花の姿をとらえてみたいと思います。

柳澤 和 | KAZU YANAGISAWA

## ABOUT TRIAL

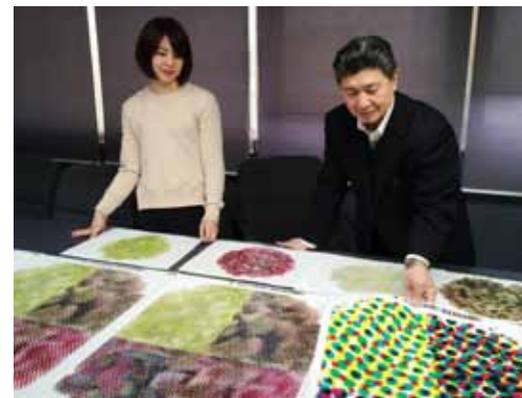
トライアルについて

### ●制作の背景

普段、私はカタログ制作に携わっています。そこは、商品「そのもの」をいかに適切に紙面で伝えられるかが求められる世界です。「もの」の平均値を探る行為ともいえるかもしれません。しかしながら私たちは、個々に異なる条件や心象のもとで「もの」に接しているので、同じものであっても、いつもどこか違って見えているはずです。

考えてみると「そのものらしさ」とは、一体どこにあるのか不思議な気がしてきます。「もの」は私たちの頭の中、記憶の積層の中にも「印象」としてふわっと存在したりしています。もしかしたら「これだ」とクリアに提示できないことが真実なのかもしれません。そこで、今回はいつもとは異なるアプローチで「そのものらしさ」を探ることにしました。

また、この機会に「印刷で何ができるか」を自分の目で確かめてみたいと思っていました。普段は、ごく一般的な手法に限られた印刷がほとんどです。それにMac上でできることは、自分でもある程度は想像できてしまいます。そうではないことをしてみたい。刷って見ないと結果がわからないような、今まで見たことのない特殊な印刷物を見てみたいと思いました。しかも今回はベテランのプリンティングディレクター、十文字さんがついてくださいます。一体どんな世界に導いてくださるのだろうか、ワクワクしながらチャレンジしました。



### ●作品コンセプト

「織る」というテーマから、最初に浮かんだのは、「フラワープリント」でした。オーガンジーなどの透ける素材に花がプリントされているようなイメージです。それが目の前にあった時、人はそのディテールを見ているのかというと、そうではなくて、そこから触発されるフuzzyな世界を見ているのではないかと思います。そこには現実と幻想を行き来するような行為が発生しているのではないかと…。そんな、虚像を具現化するという矛盾をコンセプトにしました。

まさにこの「虚像」と「実態」のギャップを最初に感じたのが、幼い頃「花」を見た時のこと。萎えていたり、傷んだりしている花びらを見て、想像していたものと違うと思ったのでしょうか、すごくがっかりしてしまったのです。それが実際の花の姿なのですが、それでもやはり、思い浮かべる花がいつも美しいのは、美しい花の印象が、積層されて根づいているからなのだと思います。でもそれは、あくまで「印象」ですから、はっきり像を結んでくれません。儚くて、もどかしい思いばかりが募るけれど、だからこそ惹きつけられる花の姿。淡いけれど、濁らずクリアで、まるで色をまとった空気のように浮かんで消えていってしまうような花の像。積層する印象の中でたゆたう花の様子に「織」というテーマを重ねてみました。

## たゆたうように像を結ばない表現を印刷でつくる

「遠くから見れば花だとわかるのに、近づくと拡散して像を結んでくれない、そんなもどかしい思いにとらわれそうな表現を、5色のアジサイを素材に追いかけてきました。減調やインキの濃度、線数、網点の形状などさまざまな印刷技術でアプローチしながら、「たゆたう像」をつくりだす組み合わせを探ってみたいと思います」

### 画像を織り重ねて たゆたう像をつくる

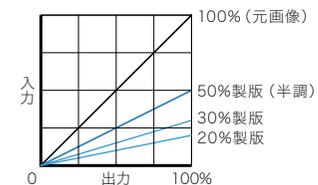
たゆたう像をつくる実験。用紙はアリンダを使用。この透明なフィルム状の紙に印刷することで、全体が空間に溶け込むような透明感を持たせている。画像はほぼ通常通りの4色分解。CMYKを3回刷り重ねることを基本に、製版やインキなど印刷技法で変化を与え、下記のアプローチの有効性を検証した。

- トーン：製版で減調した版  
(50%製版、30%製版、20%製版)
- インキ：メジウムでインキを希釈  
(インキ濃度50%、30%、20%)
- 線数：線数の異なる版  
(400線、50線、30線に相当する疑似網点)
- 網点：形状違いの網点  
(ランダム、スクエア、ラウンド)

原稿



●減調とは  
全体の階調のバランスを保ったまま明るくすることで画像のコントラストを下げる手法。



①ノーマル  
CMYK (175線) を1回刷り



②薄め方の検証  
3種の減調したCMYKを刷り重ねる



3種の希釈したインキを刷り重ねる



③スクリーンの異なる絵柄を重ねて「たゆたう像」をつくる  
3種の線数を刷り重ねる



3種の網点の形状を刷り重ねる



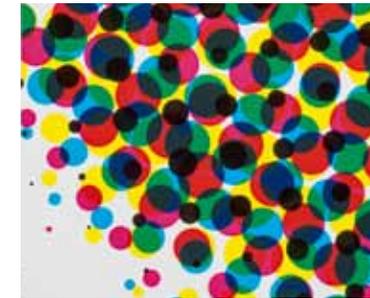
結果：減調して刷り重ねると階調にフラットな部分が出て緩やかなトーンになり、ふわっとした印象になった。インキ濃度を薄めると透明なフィルム上では想像以上に弱い発色に。また、線数違いでは微妙に崩れた像が面白い表現になる可能性を感じられた。

### 極端に粗い網点で像を結ぶ距離を確認

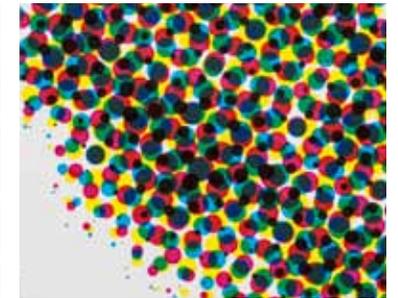
遠くからは視認できて、近づくとつれ像が拡散する画面をつくるため、展示会場で見ると距離を想定しながら網点の大きさと像の見え方の関係を確認する。網点はPhotoshopで作成した疑似網点。

※右写真は原寸ではなく、縮小された状態です。

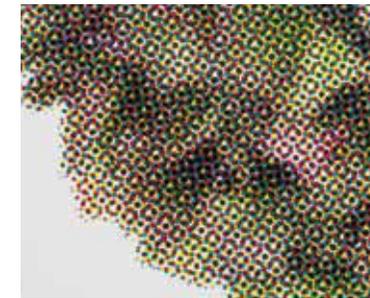
●1線相当



●2線相当



●6線相当



●15線相当



結果：1線相当の網点の間隔は約2.5cmとなり、2線での間隔は半分の約1.25cm、また、網点の面積は4分の1になる。1線では遠くでも近くでもほとんど像の形を認識できないが、2線を越えるとはっきりした絵柄ならある程度視認できるようになってくる。結論として、再現する画像の色みやコントラストによって、「見える、見えない」の境が異なることが確認できた。

### 透明感のある質感を背景色で検証する

透明感を保ちながら鮮やかな色をくっきりと浮かび上がらせる背景づくりを検証する。透明なフィルム上ではインキの発色が極端に弱まる。濃い絵柄の再現ならインキ濃度もある程度確保できるものの、薄い絵柄では背景を透過しすぎて見えづらい。そのため、透明のフィルムに印刷する場合には、絵柄の下にオベークホワイトや銀を刷ることが多い。今回は減調した3種の絵柄を刷り重ねて試した。

●オベークホワイトなし



結果：オベークホワイトなしでは、存在感が弱すぎるため、絵柄の下にオベークホワイトを刷ることにした。それを裏面から見ると(オベークホワイトが絵柄を白く隠蔽した状態)、ペール越しに見えるような、やわらかな感じを得られたので、オベークホワイトを絵柄の上に刷るものと、下に刷るものとを使い分けることにした。

●絵柄の下にオベークホワイト

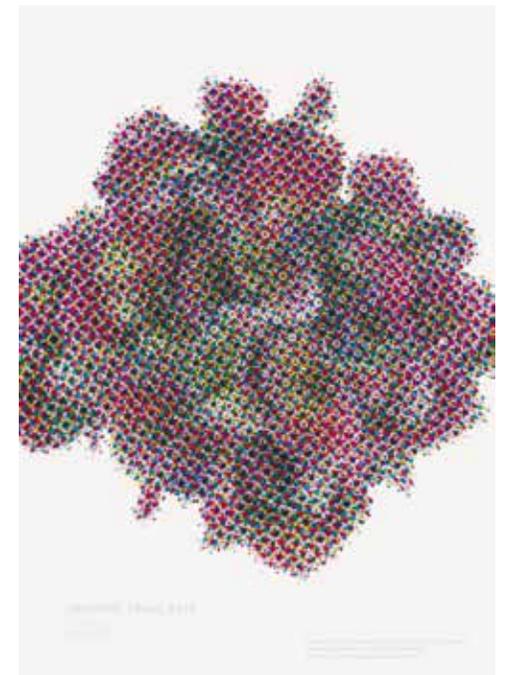
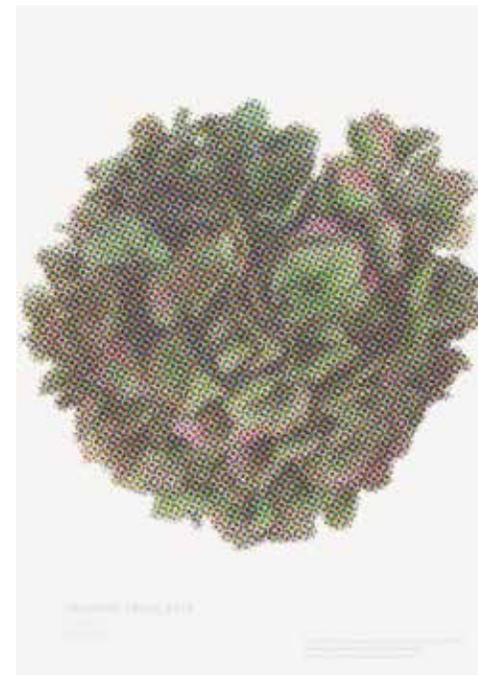


●絵柄の上にオベークホワイト



# FINISH

全作品



## POINT & COMMENTARY

ポイントと解説



用紙：アリンダ（OFT-N100）／四六判 100μm

### 版構成



### POINT



フェアドット／30%製版

300線／40%製版

280線／50%製版

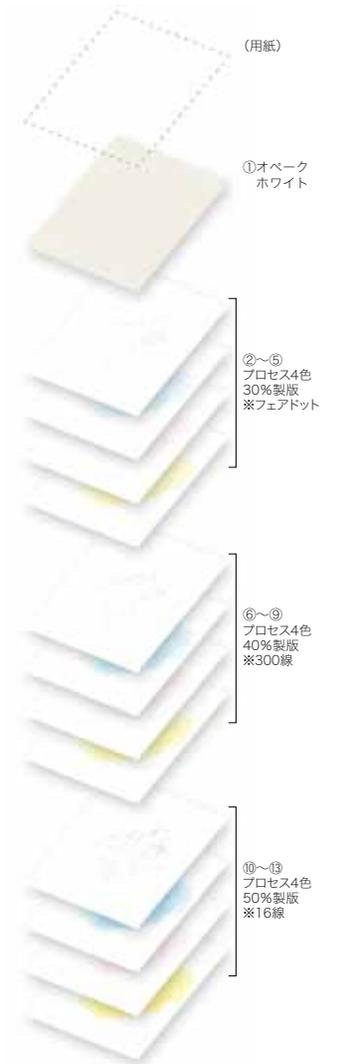
#### ●設計について

「今回の作品は同じ花を異なる製版手法で3回刷り重ねています。通常の濃度のままだと濃すぎるので、3回刷り重ねた時に適正な濃さになるように、各絵柄を30%、40%、50%製版に減調したものを刷り重ねました。これにより、シャドウ部から中間部にかけて、なめらかに階調が表現できました」（十文字）



用紙：アリンダ（OFT-N100）／四六判 100μm

### 版構成



### EPISODE



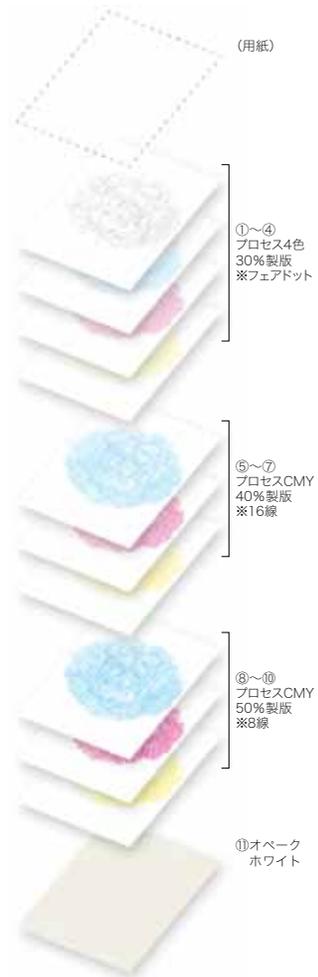
#### ●アジサイについて

「日本原産のアジサイは、海外では日本の花の代表のひとつとされ、フランスでは“日本のバラ”と呼ばれるそうです。この小さな花が集まったアジサイを、細かなドットの集まった印刷で表現するのどこか不思議な縁を感じます。しかも、パールカラーやダークトーンなど色みや濃淡が多彩であるのも、印刷と似ているかもしれません。6月の中旬から一番の見頃を迎えるアジサイとともに、作品を楽しんでいたいただけたらと思います」（柳澤）



用紙：アリンダ (OFT-N100) / 四六判 100μm

### 版構成

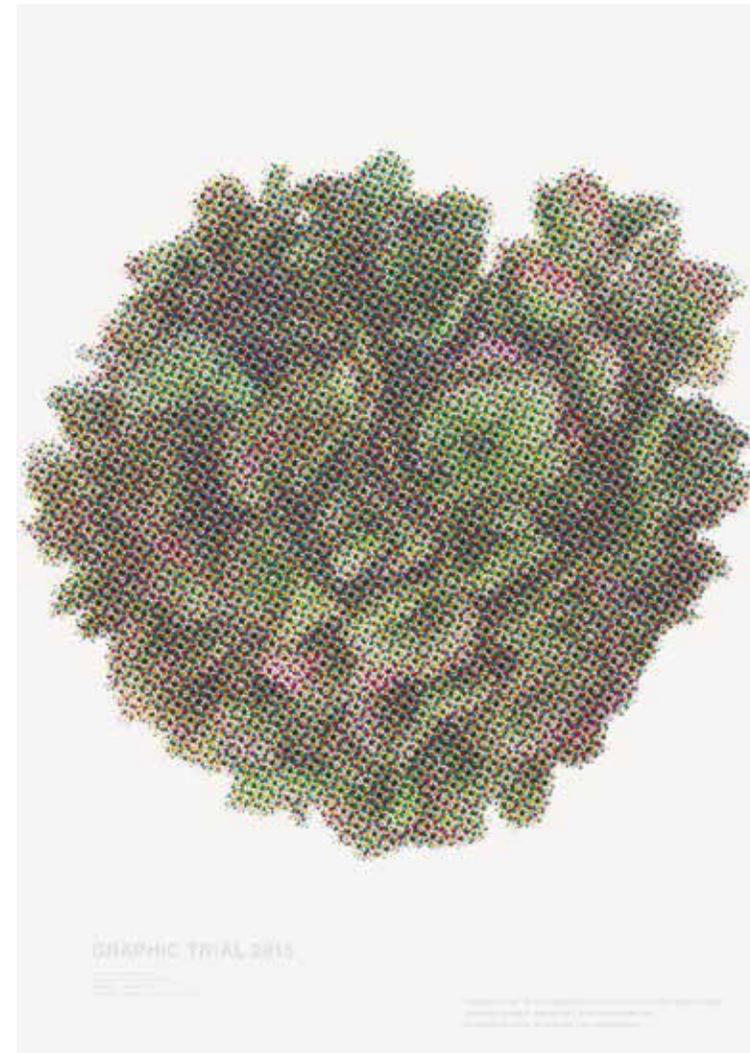


### EPISODE



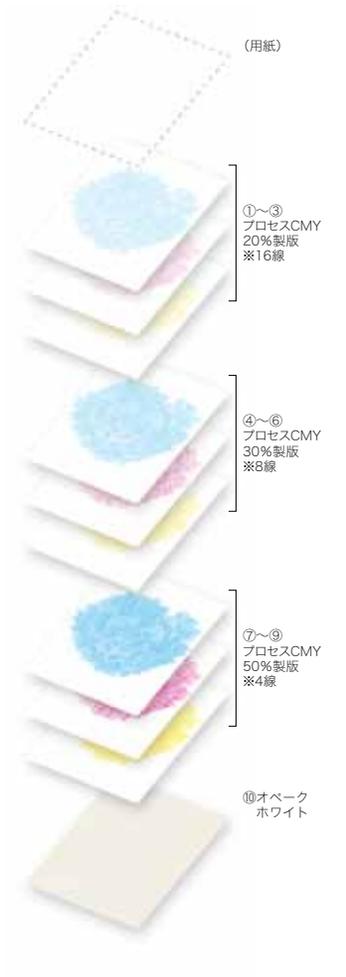
#### ●モチーフ撮影について

モチーフのアジサイを撮影したのは、グラフィックトライアル2014参加クリエイターの南雲暁彦氏（凸版印刷）。「たゆたう像」の元になるアジサイを忠実に再現するために、あえて高解像度のカメラを使い、花びら一枚一枚までの質感や色み、立体感を写し撮った。



用紙：アリンダ (OFT-N100) / 四六判 100μm

### 版構成

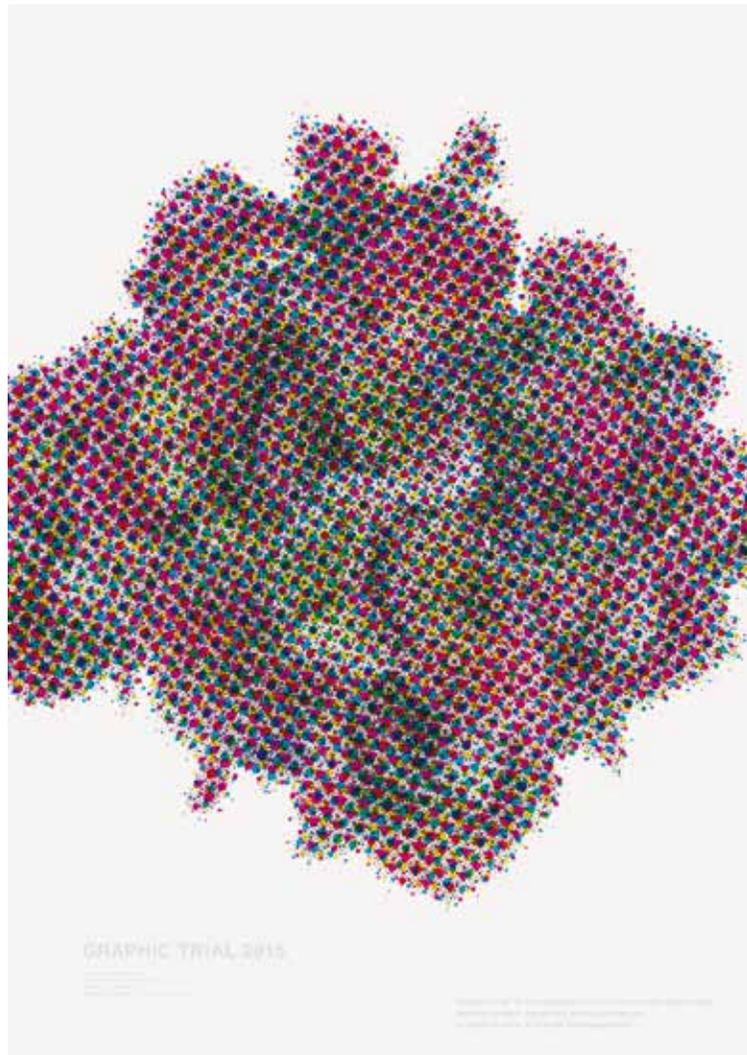


### EPISODE



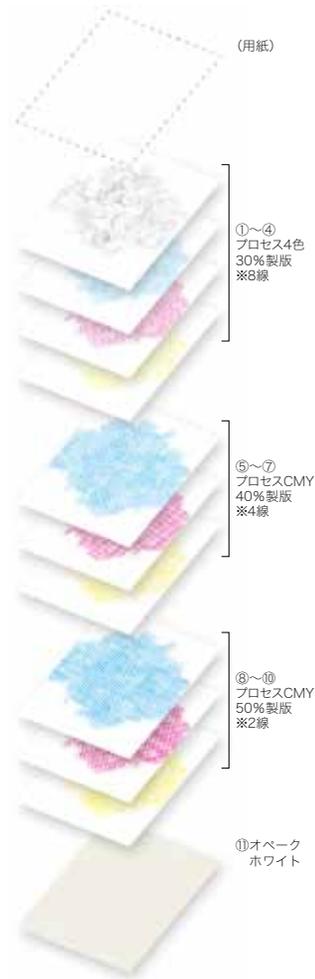
#### ●透明素材ならではの印刷表現に挑戦

紙より格段に平滑で、インキのノリも紙素材とはかなり違うアリンダ。グラフィックトライアルでも最終作品では初登場となる素材だ。印刷面の裏側から透かし見ることで、インキの素材感を完全に消すという重要な役割を担っている。しかもオベークホワイトを絵柄の上や下に刷り分けることで、「儚げ」「浮遊感」「たゆたい」の表現にも大きな効果を発揮している。



用紙：アリンダ（OFT-N100）／四六判 100μm

### 版構成



## AFTER TRIAL

トライアルを終えて

### ●トライアルを終えて

スタートしてまだ間もない頃、「なんとなく柳澤さんの考えているイメージに近い気がするんだよね」と十文字さんが提示してくださったのが「アリンダ」という透明なフィルム状の用紙でした。水面やショーウィンドーに映り込んだ写像のような、実態のない世界を表現したいと思っていた私にとって、この出会いは、まさに物質感のない世界への入り口のように感じられました。「空気に印刷するように」という私のイメージを、十文字さんはいち早く察知してくれていたのでしょう。これを起点に、虚像を具現化するという矛盾をはらんだコンセプトがどんどん具体化していきました。

今回、私が用意して提示したのは、「たゆたう」というキーワードと、5種類のアジサイの花を忠実に写し撮った画像だけ。求めているファジーな世界を、印刷というハード面からアプローチするとどのような表現ができるかという投げかけに、十文字さんは、網点や線数、トーン、インキなど、あらゆる製版や印刷の手法を一覧に見せてくださいました。

選んだ紙も手法も、それらの複雑な組み合わせも、すべてが刷ってみないと結果のわからないものばかり。普段の仕事の延長線上にあるというのではなく、もう全く知らない世界に飛び込むような気持ちでしたが、出校のたびに、自分の意図のその先に出会うような高揚感がありました。まさにそれが、プリンティングディレクターの力なのだと感じました。

今、完成したポスターを眺めながら、スローなコミュニケーションというのも、この紙メディアのひとつの側面ではないかと感じています。ポスターの役割が本来、明確なメッセージを伝えることにあるのは確かでしょう。でも誰かがそのポスターを気に入って部屋に飾ったとしたら、それはインテリアになります。強い言葉で語りかけはしないけれど、現実から幻想への窓口として静かなひとときを提供するようなもの。それもまたこの媒体の大切な役割ではないかと、トライアルは気づかせてくれました。

—— 柳澤 和

### ●プリンティングディレクターから

「たゆたう」というコンセプトを伺った時、このファジーなイメージを印刷で具現化するのは、まさにプリンティングディレクターの力量を発揮する場だと感じました。

まずは用紙の選択です。薄紙から和紙まで広く検討した結果、柳澤さんのイメージにマッチしたのが透明な用紙、アリンダでした。アリンダは印刷実績が少なく未知な部分も多い素材です。しかし新しい素材への挑戦もトライアルならではの。フィルム状の用紙にオフセット印刷が可能だということを知っていただくためにも、印刷特性や表現の幅を検証することは重要だと考えました。柳澤さんの豊かな発想が思いがけないアリンダの個性を引き出してくれたこともあり、とても有意義な実験になったように思います。今回は叶いませんでしたが、銀や金をバックに刷っても、また違った風合いが期待できる用紙です。

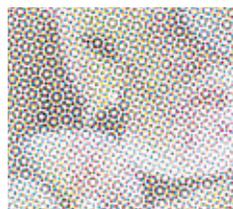
印刷技法は「印刷を織る」をテーマに考えました。網点やトーンが異なる4色分解の版を何重にも重ねることで揺らぐような像を実現しようと試みました。印刷技術から抽出した表現手法をふだんに盛り込んだ、正統派ながらもマニアックでトリッキーな内容になっています。

上品かつ透明で、儂げながら鮮やかな「たゆたう」ポスター。初夏の風に揺らいている姿を思い描きながら…。

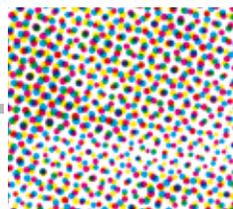
—— 十文字 義美



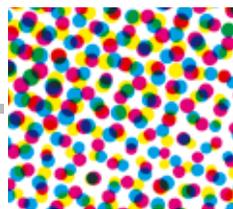
### POINT



8線／30%製版



4線／40%製版



2線／50%製版

### ●構成について

3種の異なる線数、2線、4線、8線の絵柄を刷り重ねている。近くから見ると、網点の織り重なる様が見え、遠くから見ると、アジサイの像を結んでいく。ポスターを見る距離によって大きく見え方が異なる。

※左写真は原寸ではなく、縮小された状態です。